子どもの成長過程における文化的介入としての絵本

杉本　尚美

はじめに

日本経済が発展し、人々の生活が豊かになるにつれ、子どもは家庭の仕事を手伝う「労働者」から、家族の中心的存在である「消費者」へと変化した。現在、子どもたちはテレビ・ゲーム・漫画などさまざまなメディアを選択し、それぞれの好みにあった「物語」を消費している。しかし、その中で絵本は子どもが初めて触れる最も影響力の強いメディアである。育児中の母親が、自分の子どもに「良い絵本」を与えたいと思うことはごく自然のことであろう。それは、絵本が子どもの人格形成に深いかかわりを持ち、幼児期の教育において重要な位置を占めているからである。しかし現在、「良い絵本」というものを探し出すことは簡単なことではない。なぜなら、かつて「子どものため」の本であった絵本が、その枠を外れて多様化し、目的も対象も異なる商品として氾濫しているからである。絵本の多様化によって、母親たちは「良い絵本」とは果たして何なのか、子どもにどのような絵本を与えるべきなのか、という見極めにくい状況にあるといえる。子どもが自分の好みで能動的に絵本を選ぶようになるまでは、選書は母親まかせであり、そこには大きな責任が伴うのである。

大人たちの選ぶ「良い絵本」の中には無意識のうちに子どもに求めている「純粋」で「素直」で「かわいらしい」子ども観が存在し、「こんな人間に育ってほしい」という期待や願望が込められていることは明らかである。しかし、子どもたちが好きな絵本と大人たちが「良い」とする絵本は必ずしも一致しない。よって、母親は自分達の主観で闇雲に絵本を与えるのではなく、年齢によって内容を変えるなど、子どもに合ったものを責任を持って選び与えていくことが重要であり、またそれが幼児期の教育の第一歩といえるのではないだろうか。

以上をふまえ、本論文では、育児のために使用する際に、想像力の成長および人格形成にとって「良い絵本」とは何か、それはいかにして定義付けられるものなのかについて考察する。第１章では、絵本の最盛期といわれている１９６０年代から現代までの絵本の変化について、それぞれの時代の傾向を押さえながら明らかにするとともに、現代絵本の種

類やその内容など、その現状について考察する。第２章では、まず現代の母親が絵本の情報をどのような形で得、育児の中に取り入れているのかを述べる。続いて、育児中の母親向けに出版されている絵本のガイドブックや、絵本の専門家たちの主張から「良い絵本」の定義を明らかにする。そして、このような専門家たちのあいだでも評価の高い、モーリス・センダック作の『かいじゅうたちのいるところ』という作品について、専門家たちの示した「良い絵本」の定義と照らし合わせながら分析する。第３章では、ヴィゴツキーの「想像力の成長は経験の多様さ、豊かさによって促される」という想像力に関する主張、そして「「現段階の発達」に合わせるだけではなく、「１歩進んだ段階」を重要視するべき」という教育に関する主張を明らかにしたうえで、２章で示した専門家たちの「良い絵本」の定義と比較し、その矛盾点について考察する。第４章では、これまで述べたヴィゴツキーと専門家たちの定義・主張をふまえたうえで、「家庭の中での経験によって、子供のアイデンティティが形成される」というバーンスタインの主張について述べる。続いて、メアリー・ダグラスが示した、バーンスタインの主張を総合した家庭環境の分類図から、それぞれの家庭が持つ子育ての傾向や絵本の選書の傾向について考察し、そこから導き出される「良い絵本」の意味について論じる。

第　１章　絵本の多様化

好きな絵本は何ですか？こう聞かれて答えられる人はどれくらいいるだろうか。この問いに答えることが出来る人たちの多くは、幼い頃母親に読み聞かせてもらった（もしくは自分で読んだ）思い出の１冊をあげるだろう。私たちが絵本と聞いて、まずはじめにイメージするのは「絵と文字からなる子供向けの本」だろう。しかし近年、絵本の枠は大きく広がり、必ずしも「子どものため」だけのものではなくなってきている。書店に行けば大人向けの絵本コーナーが作られていたり、雑貨屋などでもおしゃれなアイテムのひとつとして絵本が販売されている光景はもはや珍しいことではない。絵本の対象年齢の幅が広がることにより、絵本のジャンルも拡大し毎年たくさんの絵本が出版されている。第一章では、絵本の多様化にいたるまでの流れを１９６０年代の絵本の変化の最盛期から追い、現代における絵本の現状を考えたい。

１．　１９６０年以降の絵本

１９６０年代は、東京オリンピックの開催とともに日本の経済が大きく成長し始めた時代である。高橋久子はこの状況を、「資本主義の流れを根本に敷いた小市民的生活の定着があらゆる面で影響を与えていることを感じる」（高橋久子　2002：163）と表現した。絵本に登場するきれいに整備された道路や車、新幹線などの乗り物も、夢物語の中に登場する架空のものではなく、自分たちの生活と結び付けて考えられるようになった。子どもたちは自分たちの生活と絵本に登場する物の距離が近くなったことで、より絵本に感情移入しやすくなったのではないだろうか。

日本の高度経済成長は１９７０年代に入ってもますます加速し、人々の生活も豊かになり始める。中川あゆみはこの時代の絵本について、「高度経済成長の波に乗り、日々の生活に少しゆとりのできてきた人々が、物質的豊かさだけではなく、精神的な豊かさを求めて、また子どもたちの豊かな成長を願ってさまざまな試みをする中で、絵本もまた大きく成長したのである」（中川あゆみ　2002:167）と述べた。

１９８０年代の動きについては、三浦精子が次のように述べている。１９８０年代は、校内暴力や家庭内暴力が増加するなど、子どもの心の問題が現れた。一方、絵本は全盛期を迎え、書店の絵本コーナーにはあふれるほどの数の絵本が並んだとともに、「絵本にっぽん賞」などの絵本賞も充実し、絵本の質は向上した。さらに賞とは別に、全国学校図書館協議会では毎年「良い」本を選定し冊子を発行し続けている。また、戦争や公害についてなどの社会問題の絵本が急増したのもこの時代の特徴である。

バブルが崩壊し、急激な社会変化が訪れた１９９０年代は、少年犯罪の低年齢化・不登校・いじめなど子どもの心の中に大きな闇が現われ始めた。絵本は物語の内容や表現方法などがさらに自由化、多様化し「なんでもあり」な状況が生まれた。そして、絵本とはいったい誰のためのものなのかという線引きが失われていった。またこの年代は「赤ちゃん絵本」の出版の増加、大人読者の増加が特徴として挙げられる。そして、あらゆるジャンルの絵本が氾濫し続けている今、「絵本とはなにか」「誰のための絵本なのか」という絵本の本質が改めて問われるべき時代が来ているといえるだろう。

２．現代絵本の現状

急速な経済発展により子供を取り巻く社会環境は大きく変化した。少子化が進み、アニメーションやテレビゲームなど視聴覚メディアの台頭を背景に絵本は様々な方向へと枝分

かれし、現代における絵本のジャンルは増加した。現代の日本において出版されている絵本のジャンルとして挙げられるのは、

①ストーリー性のある物語絵本

②男女問わず好まれる動物絵本

③男の子に人気の乗り物絵本

④昔から語り継がれている物語や民話を描いた昔話絵本

⑤紙芝居などの大型絵本

⑥知識絵本や科学絵本

⑦幼稚園や保育園で使われる保育絵本

⑧排泄、食事、言葉や数字を知るために用いられるしつけ絵本

⑨主に０歳児～３歳児向けの赤ちゃん絵本

⑩こどもの想像力を駆り立てる文字なし絵本

⑪近年になって増加してきた大人向け絵本（アダルト絵本とも呼ばれる）

⑫写真絵本

⑬アニメ絵本

⑭仕掛け絵本

などである。特に⑧から⑭の絵本は１９６０年以降活発になってきたジャンルである。また、この他にも、アニメ絵本としつけ絵本両方を兼ね合わせたもの、仕掛け絵本と昔話絵本を組み合わせたものなども存在するので、それらを全て含めると一言で絵本といっても非常に細分化されていることがわかる。

永田桂子は、著書の『現代絵本の世界』の中で現代絵本の大きな特徴について３つ挙げている。まず１つ目は大人読者対象の絵本が一つのジャンルとして確立したことである。内容的に見ると菊田まりこ著の『いつでも会える』のように、視覚的イメージ優先の、対象を特定しないイメージブック化した絵本があげられる。これらの絵本は児童図書としても、ビジュアルな本としても扱われる。また、レオ・パスカーリア著の『葉っぱのフレディ』のように、作家の私的な思いや考えをつづって絵本仕立てにしたものが出版されるなど絵本のモノローグ化もあげられる。また、グッズデザイナーが書く絵本が増加したことで絵本がグッズ感覚で買われるものになった。これらはたいてい「おしゃれ」とか「かわいい」という言葉で形容される絵柄になっている。そして多くの本が視覚化（ビジュアラ

イズ）されると、その本の挿絵を担うイラストレーターたちが出現し、注目されるようになった。その流れで大人対象の絵本が注目されるようになり、出版社も積極的に大人対象の絵本を出版するようになる。　２つ目の特徴は、絵本の形態加工の進行である。特に仕掛け絵本は近年かなり注目されている。また、小型絵本や障害者を意識した絵本なども出現し、もはや絵本は「子どものため」だけのものではなくなったと言える。　３つ目の特徴は０・１・２歳児を対象にした「赤ちゃん絵本」というものが増加したことであろう。

３．現代絵本の現状－赤ちゃん絵本とブックスタート

絵本が様々なジャンルに多様化された現代絵本の特徴のひとつとして、赤ちゃん絵本がある。赤ちゃん絵本とは、主に０・１・２歳の子どもを対象にした絵本のことで、最初に手にする絵本という点から「ファーストブック」とも呼ばれている。そして、この赤ちゃん絵本は、いま一つの絵本のジャンルとして確立しようとしている。赤ちゃん絵本として有名なシリーズは『ブルーナの０歳からの本』、『ディズニーの０歳絵本』、『０歳からのパターン認識えほん』、『子どもがはじめてであう絵本』などである。この他にも、「あかちゃんえほん」や「０歳」、「ファーストブック」というキーワードを含むタイトル、シリーズの絵本は多く出版されている。

また、この赤ちゃん絵本は、２００１年４月から実施されたブックスタートによって注目されるようになったともいえよう。ブックスタートとは、特定非営利活動法人が全国の市区町村の自治体や図書館と協力して行っている、０歳児の赤ちゃんに絵本をプレゼントしようという取り組みである。絵本はおもに、それぞれの地域で実施される健康診断や検診などを通して子どもと母親に与えられる。特定非営利活動法人によれば、ブックスタートは現在、全国１８２３市区町村中６２９市区町村の自治体によって行われており、これからますます「あかちゃん絵本」の知名度の上昇は期待される。赤ちゃん絵本によく見られる特徴は、絵本のサイズが小さいこと、絵本の角が丸くなっていること、抗菌加工が施してあることである。絵本のサイズが小さめなのは、赤ちゃんが自分で持てるようにという配慮からであろう。また、特にこの年頃の子どもは絵本をわたすと、かじったりなめたり投げたりするので、危険防止のために絵本の角を丸くしたり、抗菌加工を施していると考えられる。このように様々な手厚い細工が施される、赤ちゃん絵本の作品と内容については次章で詳しく述べたい。

では、赤ちゃん絵本はなぜ増加したのであろうか。出生率が２％に満たない現在の日本

において、親が一人の子どもにかけられる時間とお金は昔に比べれば格段に増加しているといえる。そのような状況の中で、早期教育も低年齢化し、他の子どもに遅れをとってはいけないと就学前から子どもに英語や読み書き、計算を学ばせるなど、躍起になる母親が増えている印象を受ける。そのような早期教育の高まりが、赤ちゃん絵本の増加に関わっていることは明らかであろう。あかちゃん絵本のテーマとしては動物、乗り物、食べ物、生活、遊びに関するものが多いが、永田桂子も言うように、「従来この年代の絵本は「遊び」中心に構成されて、「教育」（しつけや知識）は「遊び」の中で扱われるのが一般的だったが、最近は教材として作られる絵本が登場している」（永田桂子　2004:53）こともあり、はじめから教育を目的とした、子供の早期教育を望む親向けの絵本の出版も活発になっていることが伺える。 また、特定非営利活動法人は、ブックスタートの活動目的として「赤ちゃんのことばと心を育むためには、抱っこの暖かさの中で人といっしょにいるぬくもりを感じながら、優しく語りかけてもらう時間が大切だといわれています。ブックスタートは、そのかけがえのないひとときを「絵本」を介して持つことを応援する活動です」（特定非営利活動法人ブックスタート　http://www.bookstart.net/ 2007. 11. 21）と述べている。ここでは、ただ親子に絵本を与えるだけではなく、絵本を介して親子のコミュニケーションを図るきっかけづくりをしたいという望みも含まれており、絵本を読ませるというよりは、絵本を通しての赤ちゃんと母親の間のコミュニケーションの重要さを謳っている。赤ちゃん絵本増加の裏には、早期教育の高まりだけではなく、人と人とのコミュニケーションが希薄になっている現代の日本人の問題が関係しているともいえよう。

絵本は子育てにおいて非常に重要なアイテムのひとつといえる。感情を豊かにする、文字や数字を覚える、子どもと一体感をもってコミュニケーションができる…絵本にはたくさんの利点がある。また、三つ子の魂百までという言葉があるように、子どもたちに絵本を読み聞かせたり絵本を与える側である親にとって幼児期の教育というものは子育ての中でも重要な位置を占めている。しかし、絵本の多様化によって書店や図書館に莫大な量・種類の絵本が氾濫していることで、子どもにとって良い絵本を選びたい母親達を混乱させているのではないかという問題もある。絵本のガイドブックなどのマニュアル的な本も出版されてはいるが、全ての子どもがそこに示された絵本を気に入るとは限らない。よって子どもに絵本を与える側の母親も最低限の絵本の選書力を持つ必要性があるといえる。では、このような状況に置かれている現代の母親たちはどのような基準で絵本を選び、与え

ているのだろうか。

第　2 章

「良い絵本」の定義

1．　情報社会の絵本

絵本の多様化によって「良い絵本とはなにか」ということが見えにくくなってきている。とはいえ、母親達が子どもに良い本を与えたいという気持ちは変わらない。「子どもにどのような絵本を与えればいいのかわからない」という育児中の母親向けに、絵本のガイドブックが出版されている。この類の本は純粋に児童書の専門家達が良いとするものが紹介されているものもあるし、年齢別に読んでほしい作品を紹介しているものや、家族・友達・食べる・寝るなどテーマ別に分けて紹介されているものもある。このようなガイドブック的な本の中で評価されている作品は，昔から読み継がれている名作と呼ばれる絵本が多い。毎年多くの絵本が出版されている反面、専門家達の評価を受ける作品は少ない印象を受ける。それだけ内容的に、彼らの考える「良い絵本」の基準をクリアする本が生まれていないということでもある。

このようなブックリストはもちろん、育児雑誌や友人同士の口コミでも絵本の情報は得ることは出来るし、図書館や自治体が行っている読み聞かせへの参加を通しても情報は得られる。また、最近ではインターネット上で絵本を紹介するサイトも登場している。例えば「絵本ナビ」というサイトは子どもに絵本を選ぶための情報を集めた、参加型絵本情報サイトである。実際に子どもとその作品を読んだ率直な感想や子どもの反応を母親たちが投稿し、生の声を掲載することを目的にしている。また、「おはなし絵本クラブ」というサイトはパソコンで楽しむデジタルの絵本であるハイパー絵本を、インターネットで配信する会員制のサービスを行っている。しかし、いくら他人から良い情報を得たとしても、最終的にその本を子どもに与えるかどうかを決めるのは母親なのである。子どもが自分の好みで自分から能動的に絵本を選ぶようになるまでは選書は母親まかせであり、そこには大きな責任が伴う。母親は子どもにどんな絵本を与えるべきか悩むよりも、まず子どもに与えるべき絵本を選ぶための最低限の絵本の選書力を持つ大切さを知ることが重要なのではないか。

２．「良い絵本」の定義

では、児童文学の専門家や親たちの選ぶ（考える）「子供にとって良い絵本」の定義は何なのか。日本こどもの本研究会は、良い絵本の定義についてこう述べている。「子どもにとってよい本とは、彼らの認識発達段階の特質ーたとえば論理的思考とか、問題意識とか、生活的渇望の願いなどーにかなった、文化的世界がくりひろげられているものだと考える。そして、子どもたちがその世界を体験することにより精神的な愉悦観と開放感を味わうと同時に、より豊かな人間的成長への契機となるものでなければならない」（日本こどもの本研究会　1985:11）さらに絵本を選ぶ具体的な基準としては、『えほん　子どものための３００冊』の中で、

１．取り上げた主題が明確で、作者が想定する子どもの発達段階に適したものであること。

２．全体がその主題に沿って整理統一されていること。

３．絵の流や文章が明快で、子どもに理解できるものであること。

４．色調・線描がいきいきとして、子どもの想像力やイメージを豊かにし、自然な感動を呼ぶものであること。

５．洗練された美しい日本語が使われ、絵と文がよく調和していて、違和感がないこと。

６．本づくりの細部まで、子どもへの深い理解と愛情が感じられるものであること。

という６点を挙げている。

つぎに、渡辺茂男は『絵本の与え方』の中で良い絵本の条件として次の５点を挙げている。

１．ひとつの意図が１冊に行き渡ったもの

２．芸術的に優れた絵、子供に良くわかる芸術性があるもの。甘ったるい、大人が勝手に決めるかわいらしさは芸術ではない。

３．優れた言葉・文章・物語なもの

４．絵と文章の一致したもの

５．子どもの発達段階に適したもの。

さらに、『絵本の与え方』の中でも良い絵本とは「空想性、芸術性、物語性、科学性、社会性、情緒が豊かなもの」（渡辺茂男　1978：86～94）であると述べている。

彼らの主張に共通していることは、絵本全体の中の主題が明確であって内容にブレの無いもの、そして絵・文が芸術的にも文学的にも洗練されているもの、そして子どもの発達

に適した絵本であること、の３点である。日本子どもの本研究会も、「本を選んで与える場合、注意すべきことは、子どもの成長・発達をたてにだけ考え、先へ先へと階段をのぼらせることよりも、今の段階をふまえて、横のひろがりを助けてあげることのほうがたいせつだということです」（日本こどもの本研究会　1972:26）と述べている。家事・育児にただでさえ忙しい母親が、絵本の選書に多くの時間を割けないということは明らかだが、この基本の３点を頭の片隅に入れておくだけでも絵本の選択肢は絞られてくるのではないか。

３．子どもの発達段階と絵本

このような絵本のガイドブックの中でよく紹介されている絵本を年齢別に分けて見てみたい。

「赤ちゃん絵本」と呼ばれる、０・１・２歳向けの絵本で評価が高い作品は、松谷みよ子文の『いないいないばあ』、多田ヒロシ作『おんなじおんなじ』、せなけいこ作・絵『ねないこだれだ』、たにかわしゅんたろう作『もこもこもこ』などである。これらの作品に共通することは作品の中で同じ言葉の繰り返し、同じ場面の繰り返しが多いことである。工藤左千夫は「乳幼児は時間の感覚が希薄です。つまりそれは、昨日－今日－明日という時間の配列、その認識がきわめて希薄なことを意味します。その場その場の感覚で生き、そしてすぐに忘れてしまう。（中略）ですから、子どもはくりかえしくりかえし同じことをするのです。そして繰り返しの行為は子どもの成長に欠かすことは出来ません」（工藤左千夫　2004:20）として、乳幼児の繰り返しの活動の重要さを主張した。また、「乳幼児期は母親と子供の一体感が重要な意味をもちます。この感覚は幼児にとって、母親の体の一部が自分であり、自分の体の一部が母親であるという心理感覚なのです。そして、これが保障されているときのみ、子どもの心身は安定していると言えましょう。そして、現象的には『模倣（物真似）』と言い、そこに重要な意味があるのです」（工藤左千夫　同上:24）とも述べている。０・１・２歳向けの 絵本は繰り返しが多いだけではなく、円形や曲線が使われている印象も強い。円形や直線は絵に柔らかさや安心感を与える。子どもはこの優しい曲線を感じることで母親（母性）との一体感を持っているのであろう。

次に、２・３・４歳向けで評価が高い絵本は、ブラウン文『おやすみなさいのほん』、なかがわりえこ作『ぐりとぐら』、北欧民話であるブラウン絵の『三びきやぎのがらがらどん』ウクライナ民話でラチョフ絵の『てぶくろ』、カール作『はらぺこあおむし』、エ

ッツ文・絵『もりのなか』などがあげられる。繰り返し表現の多い０・１・２歳向けの絵本と比べると少しストーリー性が強くなっているのは、工藤左千夫によれば、時間の感覚への意識が弱い幼児独特のイメージが、一度体験したことを、何らかの刺激によって思い出す、物事の一貫したつながりをもったイメージへと変化するようになったからであるとしている。また、２・３・４歳になると、母親と自分との区別が希薄だった一心同体的な感覚が徐々に自分と母親は異なる人間であるという感覚へと変化する。

４・５・６歳向けで評価が高い絵本はレオ・レオーニ作『あおくんときいろちゃん』『スイミー』、谷川俊太郎作『あな』、センダック作『かいじゅうたちのいるところ』、クラウス文『はなをくんくん』、アンゲラー作『すてきな三にんぐみ』などである。工藤左千夫によると、この年代の子どもは、それまでの母子一体の感覚とは異なり、自分と母親とは異なる存在であるということに気づくようになる。この気づきによって母子間に心理的な隙間が生じ、その隙間を埋めようとして、子ども達は様々な空想（擬人化・変身願望・英雄願望など）の力を発揮させるのである。工藤左千夫は「この隙間の形成は、人為的、作為的に作られるものではありません。あくまで子どもの自然な自立願望の結果なのです。そのため、強烈な過保護や過干渉で育てられた子どもは、この隙間が生じにくく、空想的な遊びのイメージが希薄になりやすいのです（工藤左千夫　同上：84）」と述べている。 このように、絵本のガイドブックで評価の高い作品は、絵や文章のすばらしさもさることながら、子どもたちの年齢ごとの発達の微妙な違いに合っているという点も、評価の対象とされている。

４．『かいじゅうたちのいるところ』 について

『かいじゅうたちのいるところ』の空想性（ファンタジー性）は、４・５・６歳の子ども達の心の発達を見事に表現した作品であるとして、多くの専門家・絵本作家に評価されている作品である。そこで、４・５・６歳向けで評価が高い絵本のなかのひとつである、センダック作の『かいじゅうたちのいるところ』について、「２．良い絵本の定義」で述べた良い絵本の定義と照らし合わせながら分析したい。

まずは『かいじゅうたちのいるところ』のあらすじについて簡単に述べたい。この物語は、オオカミのぬいぐるみを着た主人公マックスが家の中でいたずらをして大暴れするところから始まる。やがて母親に叱られるが、マックスはそれに口答えをしたため、夕食抜きで寝室に放り込まれる。するとその寝室にどんどん木が生え始め、やがて寝室は森や野

原というひとつの「世界」になる。そこへ波が打ち寄せ、マックスは流れてきた自分の舟で航海を始める。１年と１日航海をしてたどり着いたのはかいじゅうたちのいる島であった。集まってくるかいじゅうたちをマックスは目力で見事に手なずけ、すぐに島の王様になる。王様になったマックスは島のかいじゅうたちを従えて、かいじゅう踊りをしたり、暴れたりと大騒ぎする。やがて乱痴気騒ぎをやめ、夕食抜きでかいじゅうたちを眠らせたマックスであったが、急に寂しさに襲われる。そのとき、遠い世界の向こうから美味しい匂いがしてきたため、マックスは王様をやめることを決める。かいじゅうたちが泣いて引き留めるが、マックスはあっさり船に乗り込み、かいじゅうたちに別れを告げる。そして島に来たときと同じように１年と１日航海をすると、いつの間にか母親に放り込まれた寝室へと戻って来ていて、その寝室にはまだあたたかいままの夕食が置いてあった。という場面で物語は幕を閉じる。

この作品のテーマは、自我の意識（自立願望）を満足させることだろう。「３．子どもの発達段階と絵本」でも述べたように、子どもが母親と自分は違う存在であるということに気づき始めると、母子間に心理的な隙間が生じ、その隙間を埋めようとして、子ども達は様々な空想の力を発揮させるのである。この作品を通して、子どもたちは現実の世界である寝室と、非現実（空想）の世界であるかいじゅうたちのいる島を流れるような物語の展開で行き来する。物語の中でのマックスは、かいじゅうたちの王になることで自分の英雄願望を満たしている。また、マックスは寝室に閉じ込められる前もオオカミのぬいぐるみを着ていたことから、自分をなにか野蛮で凶暴なものになりたいという自分自身の心の中の思いを擬人化して、オオカミになりきっていたこともわかる。のちにマックスは空想の中でかいじゅうたちの王となり、彼らとともに大暴れすることで、自分もかいじゅうへと変身するのである。 物語の終わりが、寝室（現実の世界）に帰ってくるという点も重要なポイントである。未知の場所へ出かけ、最後には既知の場所に戻ってくるという物語の形は典型的なパターンであるともいえる。自我の欲求にまかせて空想世界へと旅立ちたい気持ちと、安心できる場所へと戻り暖かいもの（母親、家族）に守られたい気持ち、という矛盾する２つの気持ちがそこにはあることもわかる。この『かいじゅうたちのいるところ』という作品は、子どもたちがもてあましている自我意識を満足させると同時に、その対極にある安心感を求める子ども達の複雑な心のうちを見事に表現しているという点で評価されている。また、「かいじゅうたちのいるところ」は恐ろしいかいじゅうを描いているわりには、全体的に淡い色調で目に優しく、読者に安心感を与えている。さらに、マ

ックスが自分の欲求をもてあまし、寝室に閉じ込められるまでは全体的に寒色のイメージであるが、物語が進み自分の欲求が満たされていくにつれ、徐々に暖色のイメージへと変わっていく。かいじゅうたちの島に行く前（欲求が満たされる前）の寝室の色のイメージと帰ってきたときの寝室の色のイメージを比べると、後者の方が温かみを感じられる。このようなマックスの心の動きを色彩のイメージによっても表現しているとも考えられ、優れた絵・色彩として評価されている。

このように、絵本の中というもうひとつの空想の世界に入り込むことによって、子どもたちは大冒険をしてみたり、ヒーローになったり、お姫様になったりと、自分の願望の世界で疑似体験をすることができる。そして、この疑似体験（空想世界への旅立ち）は、子供の想像力に大きな関わりを持つ。絵本について書かれた書物の中でも、「絵本は子供の想像力を豊かにします」という一文をよく見かける。しかし、目に見える体の成長とは違って、心の中の目には見えない成長である「想像力」は、本当に絵本を用いることで成長しているのだろうか。

第３章　ヴィゴツキーの視点

１．想像力に関するヴィゴツキーの主張

そもそも想像力の成長とは具体的にどのような現象のことなのかを、ロシアの心理学者であるヴィゴツキーの主張から考えて行きたい。想像力を語るにあたって、ヴィゴツキーはまず２種類の人間活動の存在について述べた。１つ目は「再現的あるいは再生的な活動」、２つ目は「複合化する活動ないしは創造する活動」（ヴィゴツキー　2002:8～10）である。「再現的あるいは再生的な活動」は過去に経験したことを保持し再生する活動のことであり、新しいものを作り出す行為ではない。他方、「複合化する活動ないしは創造する活動」は過去経験の要素から新しい状況や行動を複合化し、創造的につくりかえ、新しいイメージや行動を産出することだとしている。

彼は再生活動と複合的な活動はどちらも重要なものであると主張している。とはいえ、過去の経験を繰り返し保つ活動のみ、つまり「再現的あるいは再生的な活動」だけでは過去ばかりにベクトルが向いて、今現在の安定している環境にただ適応しているだけの存在となってしまうとした。さらに「人間の創造的な活動こそが人間が未来を向いていて、未来をつくりだし、自らの現状を変えるような存在にしている」（ヴィゴツキー　同上：

11）という言葉からもわかるように、とりわけ未来にベクトルを向けることをより重要視していたといえる。

また、私達は大人よりも子どものほうが想像力が豊かであると考えがちだが、ヴィゴツキーはこれが大きな勘違いであることも明らかにした。ヴィゴツキーは子どもの想像力は大人のそれに比べてはるかに貧弱であるとし、その理由として子どもの経験の絶対的な少なさをあげた。複合化する活動、つまり想像や空想をするためには過去の経験を複合化することが必要であるから、経験の量が大人よりもはるかに少ない子どもたちは想像力が乏しいのである。さらに、「想像力による創作活動は、人間の過去経験がどれだけ豊富で多様であるかに直接依存している」（ヴィゴツキー　同上：21）とし、子ども達は多くの経験を積むことで、想像力の成熟した成人となる準備をしているということになると主張した。ヴィゴツキーの言う「経験」とは、見たり聞いたり、知ったり学んだりするということであるが、この「経験」を現実世界で得るだけではなく、絵本の中での擬似体験でも補うことは出来るのであろうか。もし補うことが出来るのならば、絵本の中で多くの経験を積むことで、より想像力の成長を促すことが出来るということになるだろう。

想像力の成長というものは非常に抽象的なものであり、それを検証することは簡単ではない。ヴィゴツキーの言うように、想像力による創作活動が、人間の過去経験がどれだけ豊富で多様であるかに直接依存しているならば、絵本に対し、過度の期待を寄せ、教育上の効果を望むことに疑問が呈されることにもなるだろう。それは、過去に経験した外界が平凡であったり、変化の無い内容で、絵本によっていくら想像力をかきたてられようと、絵本の実体験自体が希薄になってしまうからである。

２．ヴィゴツキーの主張と「良い絵本」の定義との矛盾

第２章のなかで、「良い」絵本の条件のひとつとして「子どもの発達段階に合っているもの」という考え方があるということを述べた。しかし、子どもの発達に適した本を与えることは子どもの成長にとって本当に良いことなのだろうか。「子どもの発達段階に合った絵本を与える」ということは言い換えれば「子どもが現段階で出来ることに合わせて反応を見ながら絵本を選び与える」ということでもある。今現在の子どもの成長に適しているものを与えるという考え方は、これまで見てきたヴィゴツキーの主張から見れば、子どもの心の発達にとって「良い」ものであるとは言いがたい。想像力に関するヴィゴツキーの主張の中でも述べたが、彼は子どもの過去、現状を超えてさらにその先の未来を見据え

ることを重要視している。「教育は発達を前進させなければならないということを考慮しなかった。（中略）かれらは、最も抵抗の少ない線を目標とし、子供の強さにではなく弱さに目印をおいた」（ヴィゴツキー　1975：94～95）ものであり、「「明日の水準」に目を向けるならば、「思考の特質に合う」かどうかではなく、子ども自身が独力ではできないことに目を向け、出来ないことから出来ることへの移行を考慮しなければなりません」（ヴィゴツキー　2006：29）と述べていることからもその主張の強さを見ることが出来る。

また、「教育が、発達においてすでに成熟しているものを利用するに過ぎないのであったら、それ自身が発達を促進し、新しいものの源泉となることは出来ません」（ヴィゴツキー　同上：27）として過去の経験を使って新しいものを生み出すこと、つまり思考の複合化によって自身の発達が促されることも主張している。したがって、「子どもの未来」に重きを置くヴィゴツキーの主張と「現段階での子ども」に重きを置く「良い絵本」の定義とのあいだにはズレが生じる。その理由は、上述のように、「良い絵本」が特定の絵本自体の内容や形式とは必ずしも限定されず、子どもの体験の豊かさ、多様性とも関連するからである。

「良い」絵本を与えることは子どもの想像力および精神の発達において大事なことではあるが、「良い」絵本を活かすための環境作りをすることも考慮すべき点であろう。いくら「良い」絵本を与えても、その子どもが持つ経験の差が原因でそれに反応できる子どもとできない子どもが出てくる可能性もある。体験の豊かな子どもにとって「良い」絵本が、体験の乏しい子どもにとっても「良い」絵本であるとは限らない。絵本を通して行われる親子のやりとりや日常における両親の価値観など、家庭内の環境を考慮すると、子どもの経験に差が出てくることは明らかなのである。

第４章　「良い絵本」と家庭環境

１．経験の差異

これまでに、「子どもの明日の発達」を重要視するヴィゴツキーと、専門家たちの主張から明らかになった「現段階での子どもの発達」を重要視する「良い絵本」の定義にはズレがあることを明らかにした。そしてその理由は、「良い絵本」が特定の絵本自体の内容や形式とは必ずしも限定されず、子どもの体験の豊かさ、多様性とも関連するからであるということを述べた。例えば家庭の中で絵本を読むとき、子どもの疑問に母親はどのよう

に答えるだろうか。その答え方や内容はその子供の親が持つ価値観によって変化するだろう。そして、その価値観の中で子どもたちは、見たり聞いたり、知ったり学んだりするという「経験」を積み重ねて行くことになる。このようにして積み重ねられてゆく経験値は、その量・多様性のどちらを見ても、同い年の子どもで同値であるということはまずありえない。よって、いくら「良い」絵本を使おうとも、その子どもの経験値によっては、必ずしも「良い」絵本にはなり得ないのである。バーンスタインは、子どもの道徳観や人間観は、その子どもの家族が持つ価値観によって変容すると主張した。彼の主張から、家庭環境によって子どもはどのような価値観の中で育ち、どのような経験を積んで行くのかを考えたい。

２．バーンスタインの主張

バーンスタインは、家庭の中で積まれる経験によって、子どものアイデンティティは形成されるということを主張した。まず、彼が区別した２つの異なった型に属する言語信号体系である「限定された信号体系」（以下「限定コード」とする）と、「精密な信号体系」（以下「精密コード」とする）を見ていきたい。メアリー・ダグラスはこの２つのコードから現われる、家族が持つ役割の体系を２つの型に分けて述べた。「限定コード」は、バーンスタインがいう地位的家族というものの中で生まれ、この家族の中で育つ子どもは性別による役割・年齢による地位・血縁関係など先天的に与えられたものによって定まってくる、社会的な価値の感覚を刷り込まれるとした。さらに、このような家族の中で育った子どもは成長するにつれて、「役割」の概念という枠にはまり込むことも述べた。バーンスタインは、地位志向的な諭し方をする親は、子どもの行動について社会一般や地域に受け入れられている慣例を引き合いに出すとともに、子どもの行動を性別、年齢、年齢からなる地位から行動を規制する規範に結びつけるだろうとした。例えば、「男の子がままごと遊びをしてはいけません」、「お父さんに逆らってはいけません」という諭し方である。

他方、バーンスタインが人格的な家族組織と呼ぶ「精密コード」をもつ家庭で育つ子どもは、「役割」の概念というものは重視されず、個人の自立性や価値が重視されるとした。このような環境の中に育てられた子どもは、他者の個人的な感情を気遣うこと、そして自分自身の感情を振り返って反省することで行動を制御されるとした。バーンスタインは、人格志向的な諭し方をする親は、子どもを諭す際に、親の感情（規制者の感情）と子ども

の行為の意味とを関係づけられるということも主張した。例えば、「早く寝ないと、パパが悲しむわよ」、「そんなことをして、もしあなたが犬だったらどう思うかしら」という諭し方があげられる。

３．家庭環境における選書の傾向

下図は、メアリー・ダグラスがバーンスタインの考察を総合した分類図である。（メアリー・ダグラス　1983:68）この分類図から、それぞれの家庭がどのような絵本を好む傾向にあるのかということを考察していきたい。

①基本的徳目
②基本的罪悪
③自己に関する概念
④芸術形式

A　社会的に限定された言語	C
①敬虔、名誉（各種の役割に対する尊敬） ②社会構造に対する形式的侵犯 ③自己は受動的で、構造としての環境中にあってそれと分化しない要素とされる。 ④原始的芸術：社会的範疇に手を加えて構造化したもので、人間は平板な寓話的人物となる。	①誠実、真実 ②自己に対する罪、偽善、残酷、挫折の容認 ③自己は内面的に分化した行為者で、構造を持たない環境を支配しようとする。 ④ロマン主義的芸術：個人は構造に打ち克つ（逃避、つかの間の幸福等）
家族内の統制組織	
地位的	人格的
①心理、義務 ②基本的罪悪は、社会構造の要求に応えられないことである。 ③積極的行為者で、内面的に分化し、それぞれの役割に応える。 ④古典的芸術：構造は個人に打ち克つ	①個人的成功、人類への善行 ②個人的なものであれ集団的なものであれ、一般化された犯罪。 ③孤独な主体 ④職人的芸術至上主義：創作の過程における技巧や素材に対する過度の関心
B　精密な言語	D

メアリー・ダグラスによると、Aは最も地位的で限定的な環境である。この環境に属する人々は、個人の感情や内的要因がいかなるものであっても、自分の行為には無関係であるという考え方をもち、自分自身という観念についての反省が見られないという特徴がある。また、この領域に属する人々にとって、「自己」というものは性別、年齢、地位などの外部の力によって定められるという考えを持っている。このような環境に属する親は、

性別、年齢、年齢からなる地位がきちんと描かれている絵本を好んで子どもに与える傾向が強いであろうし、子どももまたこのような絵本を好むようになるのではないだろうか。例えば、お父さんは強いという役割を強調して描いている作品として、にしかわおさむ作『おとうさんとさんぽ』などがある。また、女の子の特徴を描いた、ヴィットリア・ファッキーニ作『おんなのこなんてだいきらい　だってさ……』がある。『おんなのこなんてだいきらい　だってさ……』という作品は、おとこのこが女の子に対して持っている不満や疑問などをストレートに描いた絵本である。ページを開くと、彼が思っている女の子のイメージが次々に現われる。この絵本は一見、男の子のかわいらしい愚痴を絵本にしたものであると受け取れるが、そこには「女の子とはこういうもの」という世間一般に知られている性別についての特徴がしっかりと描かれている。たとえば、「おんなのこたちのおもちゃばこって、なんであんなにつまんないものだらけなんだろう　くだらないきせかえにんぎょうばっかりあつめちゃってさ！」や「しかもおんなのことときたら、ものすごくこわがりだろ　まったくしんじられないよ！！」、「あとおんなのこって　いつもないてばかりだろ　ほら　シクシクエンエン　あさからよるまで なきどおし　どんなことをしてもすぐ　なけばいいとおもってるんだ……」といった具合である。また、同じ作者の作品に『おとこのこなんてだいきらい　だってね……』という、女の子が男の子の不満をいうバージョンも存在する。

Ｂは、地位的な考えと精密な言語を両方持ち合わせた環境である。この環境に属する人々は、性別、年齢、地位などの役割は明確にされるべきであるという考えを持つ。そして精密な言語を用いることで、明確にされるべき各々の役割をよりわかりやすく、はっきりさせることができると考えている。この領域に属する親は、軍人のごとく、規律を重視することを良いとする傾向がある。絵本において早期教育のひとつとして用いられる「しつけ」絵本は、この領域において特に需要が高いのかもしれない。例えば、いとうひろし作「えほん・はじめのいっぽシリーズ」の『すぷーんを　もてば』や『すこしは　きれいに』、そして木村裕一作・絵の『いいおへんじできるかな』などがある。『すぷーんをもてば』という作品は、「スプーンやフォークを使ってきちんと食べましょう」というしつけがテーマである。話は単純で、犬や猫たちのようにスプーンやフォークを使わなくてもご飯は食べられるのに、なぜ人間である自分はスプーンやフォークを使わないといけないのだろうと疑問を感じる男の子が、最終的にはスプーンやフォークを使うこともまた楽しいという考えに至るという内容だ。男の子が食事をする場面にはほぼ毎回母親と父親が

登場する。男の子がスプーンやフォークをうまく使わず、ボロボロこぼしながら結局は手でご飯を食べる場面がある。その時スプーンやフォークをうまく使わない子どもの横で、両親はとても厳しい顔つきで怒っている。しかし一方、スプーンやフォークを上手に使うと、両親は先程と一変して笑顔になって褒めたり、拍手をして喜んでいる。この絵本の中には、子どものしつけというテーマはもちろん存在しているが、それ以上に「決まりを守らせる」ことに力を入れている両親の存在もまた印象的な一冊である。

Ｃは人格的な考えと限定的な言語を両方持ち合わせた環境である。バーンスタインによれば、この領域は不安定な変動期であるという。メアリー・ダグラスはこの領域に属する親は「人格的支配という手段によって子どもを育てようとするであろうが、子供たちはそれ以外の社会関係のために、限定コードにたよらざるを得ない状態になるだろう。だがここでは、個人は社会的構造以上の価値を認められている。（中略）この領域に見合う文学がある限り、ここで育てられた個人は一生のうちにＣからＤに移っていき、言語においても精密コードを操作できるようになると考えるべき」（メアリー・ダグラス　1983：70）とした。このような領域に属する親は、主人公が個人で活躍する絵本を好んで与えるだろう。

Ｄは、最も人格的で精密的な環境である。この環境に属する人々は、現在の思考の概念の枠を批判し、これを修正するために精密コードを使いこなして生きる人々である。このような環境の中で子どもたちは、社会一般に受け入れられている常識や判断に対して知的な挑戦を試みる習慣をつけるように育てられる。また、この領域は道徳や自分自身に関するもろもろの観念が社会構造から開放される領域でもある。この領域に属する親は、絵本の内容もさることながら、絵本に施されている仕掛けや技術も重視する傾向があるだろう。仕掛け絵本作家として有名なロバート・サブダの『不思議の国のアリス』や『恐竜時代』、貼ってはがせるシール絵本など、どこか他の絵本とは違うこだわりを持ち合わせているものが好まれるのではないか。

このように、親の持つ価値観や道徳観によって子どもの行為や行動が規制されるのならば、やはり子どもの経験の量や多様さには差が生じることは明らかである。第２章で述べた、専門家たちの評価を受けている『かいじゅうたちのいるところ』という絵本がいくら子どもたちにとって「良い」絵本であったとしても、地位的で限定的な価値観を持つＡ領域の親は「冒険をしたり暴れまわるのは男の子がやることよ」「母親に口答えする絵本なんていけないわ」と考え、子どもには見せることすらしないかもしれないのである。

おわりに

絵本は時代の変化とともに少しずつ多様化してきた。そして現在、書店にとどまらず人の集まる場所にはたくさんの種類や目的を持った絵本が氾濫し、「良い」絵本とはどのようなものであるのか、そして絵本は誰のための本なのか、という絵本の本質が見えにくくなっている。育児をする母親が子どもにとって「良い」本を読ませたいと言う気持ちは普遍のものであるが、氾濫した絵本の中からそれを見つけ出すことが困難になってきている。そこで登場したのが絵本のガイドブック的な役割を果たす文献やホームページであった。これらは専門家が選んだ良い絵本や口コミ的な生の声を得ることができる情報媒体として、多くの育児中の母親の助けになっているだろう。専門家のガイドブックから導き出された良い絵本の定義は、絵本全体の中の主題が明確であって内容にブレの無いもの、絵・文が芸術的にも文学的にも洗練されているもの、そして子どもの発達に適した絵本であることの３点であった。これに加えて、ロシアの心理学者ヴィゴツキーの主張から、子どもの発達に適した絵本を与えるだけではなく、子どもの発達に対して１歩進んだものを与えることの重要性もあることがわかった。

しかし、専門家たちの定義、そしてヴィゴツキーの主張から導き出される「良い」絵本というものは、ヴィゴツキーの「多くの経験を積むことで子どもの想像力、及び精神は発達を促進される」という主張が正しいならば、同い年でも今までの経験値が違う子どもたちにとっては必ずしも「良い」絵本とはなりえないのではないかという疑問を呈すことになった。このような理由において、「良い」絵本というものは安易に一般化できるものではないという考えに至った。さらに子どもの体験や経験の多様さの差が現われる理由として、その子どもが属する家庭の価値観、道徳観によって定まってくるというバーンスタインの主張も絵本を用いた子育てにおいて考慮されるべき点である。本当に子どもに「良い絵本」を与えたいと考えるのであれば、絵本の内容を吟味する力をつけることも大事ではあるが、絵本が本当の意味で子どもにとって「良い絵本」となり得るためには、その子どもが育つ家庭環境も考慮されるという点を母親が自覚することもまた重要なのである。

引用文献

（１）永田桂子『変貌する現代絵本の世界 絵本観玩具観の変遷其の２』高文堂出版社（２００４）
（２）日本子どもの本研究会『いまこどもの本とはなにか　活字ばなれと評価の混乱のなかで考える』岩崎書店（１９８５）
（３）日本子どもの本研究会『えほん　子どものための３００冊』一声社（２００４）
（４）日本子どもの本研究会『子どもの成長と読書』岩崎書店（１９７２）
（５）渡辺茂男『絵本の与え方』日本エディタースクール出版部（１９７８）
（６）工藤左千夫『すてきな絵本にであえたら』成文社〈２００４）
（７）ヴィゴツキー『思考と言語（下）』明治図書株式出版会社（１９７５）
（８）ヴィゴツキー『子どもの想像力と創造　新訳版』新読書社（２００２）
（９）ヴィゴツキー『ヴィゴツキー入門』子どもの未来社（２００６）
(10) メアリー・ダグラス『象徴としての身体　コスモロジーの探究』紀伊国屋書店（１９８３）
(11) 鳥越信ほか『はじめて学ぶ日本の絵本史３　戦後絵本の歩みと展望』ミネルヴァ書房（２００２）

(12) 菊田まりこ『いつでも会える』学研（１９９８）
(13) レオ・パスカーリア『葉っぱのフレディ』童話屋（１９８８）
(14) ディック・ブルーナ『ブルーナの０歳からの本』シリーズ　講談社（１９８４）
(15) 原田悦子ら『ディズニーの０歳絵本』シリーズ　講談社（１９８７～）
(16) クック範子ら『０歳からのパターン認識えほん』シリーズ　講談社（１９８９～）

(17) ディック・ブルーナ『子どもがはじめてであう絵本』福音館書店（１９７２～）
(18) 松谷みよ子『いないいないばあ』童心社（１９６７）
(19) 多田ヒロシ『おんなじおんなじ』こぐま社（１９６８）
(20) せなけいこ『ねないこだれだ』福音館書店（１９６９）
(21) 谷川俊太郎『もこもこもこ』文研出版（１９９５）
(22) マーガレット・ワイズ・ブラウン『おやすみなさいのほん』福音館書店（１９６２）
(23) 北欧民話『３びきやぎのがらがらどん』福音館書店（１９６５）
(24) ウクライナ民話『てぶくろ』福音館書店（１９６５）
(25) エリック・カール『はらぺこあおむし』偕成社（１９７６）
(26) マリー・ホール・エッツ『もりのなか』福音館書店（１９６３）
(27) レオ・レオーニ『あおくんときいろちゃん』至光社（１９６７）
(28) レオ・レオーニ『スイミー　小さなかしこいさかなのはなし』好学社（１９７９）
(29) 谷川俊太郎『あな』福音館書店（１９８３）
(30) モーリス・センダック『かいじゅうたちのいるところ』冨山房　（１９７５）
(31) ルース・クラウス『はなをくんくん』福音館書店（１９６７）
(32) トミー・アンゲラー『すてきな三にんぐみ』偕成社（１９６９）
(33) にしかわおさむ『おとうさんとさんぽ』教育画劇（１９８９）
(34) ヴィットリア・ファッキーニ『おんなのこなんてだいきらい　だってさ……』フレーベル社（２０００）
(35) ヴィットリア・ファッキーニ『おとこのこなんてだいきらい　だってね……』フレーベル社（２０００）
(36) いとうひろし『すぷーんを　もてば』講談社（２００２）
(37) いとうひろし『すこしは　きれいに』講談社（２０００）
(38) 木村裕一『いいおへんじできるかな』偕成社（１９９２）
(39) ロバート・サブダ『不思議の国のアリス』大日本絵画（２００４）
(40) ロバート・サブダ『恐竜時代』大日本絵画（２００５）

引用ＵＲＬ

（１）特定非営利活動法人ブックスタート　http://www.bookstart.net/
(2007. 11.21)